



コミュニケーション力を磨く

阪南大学 経済学部 准教授 崎濱 秀行さん

新学習指導要領による授業がスタートして以降、子どもの対話能力は、さらに重視されるようになっていきます。

そこで今回は、小中高校生が科学のおもしろさを直に見て・聞き・

ふれることのできるプログラム「ひらめき ときめきサイエンス」において、コミュニケーション講座を開いておられた阪南大学の崎濱秀行先生に、

子どもの「話す」「聞く」力の育み方について、お話ししていただきました。

子どもの「話したい思い」を育むことが大切

子どもにとってのコミュニケーション力とはどんなものでしょうか。

日常生活の中のコミュニケーションの場合、話すことと書くことが中心になると思います。そして、誰かとコミュニケーションをとる、すなわち対話するためには、「相手と話したい」という動機を抱くことが第一です。

小学生の場合、話すことと書くことではおそらく「話したい」という思い

のほうが強いことでしょう。低・中学年の場合は特にその傾向が強いと思います。だから、その話したい気持ちをもとで育てるかが大切だと言えます。

では、子どもの中にある話したい気持ちを育成するために、家庭でできることはどんなことでしょうか。例えば、子どもが何かを発見したり、虫などを捕まえてきたりしたとします。この時に、褒めたり一緒に驚いたりすることが大切です。子どもが自分から話した内容について、喜んだり、褒めたり、驚いたりを繰り返すことで、子どもの

心の中には、「話をすれば、誰かが聞いてくれるんだ」という実感がわきます。その実感が、話すことへの意欲や自信を高めたり、やればできるという自己効力感を高めたりすることにもつながると思います。

次に、きく力に関して考えましょう。きく力で最も重要なのは、相手の言っている内容を理解することです。しかし、相手の話を理解しようとする際、人は誰でも、自分の知っていることに照らし合わせて、個々が持つ認知の枠組みの中で理解していきます。だから、

さきはま・ひでゆき



神戸市出身、奈良育ち。大阪教育大学教育学部 中学校教員養成課程卒業、名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教育心理学専攻 博士後期課程修了。現在は、阪南大学にて教鞭を執る。中高生を対象とする講座「コミュニケーションの達人になろう - 『はなす』『きく』『みる』について 考える - 」なども実施。著書は、『子どもの現在』共著（晃洋書房）ほか。

話している人が伝えたいことと、きいている人が理解したことは、大なり小なりずれていることが多いのです。

そこで、できる限り相手の言葉に耳を傾けるという努力が必要になります。「この人は、本当は何を伝えたいのだろう」ということを考え、きき取っていくことが、大切なことです。

小学校低学年くらいでは、これはまだ難しいかもしれませんが、しかし、本人は意識することはしないでしようが、認知の枠組みは、成長とともに少しずつ広がっていきます。高学年になれば、抽象的な思考も徐々にできるようになるでしょう。ですから、相手の伝えたいことを理解する力は次第に身につけてくるのではないでしょう。

子どものコミュニケーション力はどのように育つのでしょうか。

コミュニケーション力を高める上では、話す力や書く力を高めることに加え、対人関係を形成する力を高めることなども大切であると言えるでしょう。ここでは主に対人関係形成の面をとりあげたいと思います。

子どもの対人関係形成の力を高める

の一番適しているのは、遊びでしょう。なぜなら遊びは、子どもにとって「好きなこと」「楽しいこと」だからです。遊びは、子どもの成長にとって、欠かせない要素です。彼らは、遊ぶことを通じて、対人関係を形成する力を高めていくとも言えます。例えば鬼ごっこをとりあげてみると、異年齢の子どもたちで遊ぶ場合、低年齢の子のほうが走る速さが遅いので、鬼になりやすいでしょう。しかし実際には、「低年齢の子にはタツチしない」などのルールを自分たちで作り、お互いの関係をうまく保ちながら皆で楽しく遊べるような工夫をしています。

ただ、少子化が進んでいることや子どもが安心して遊べる場所の確保が難しい現在の日本では、子どもたちが思う存分遊ぶというのは難しい側面があるかもしれません。だから最近では、土曜日などに、子どもが集まって遊ぶ機会を提供するような試みもされています。理想的な方法ではないかもしれませんが、現在の状況をかんがみると、多少はそうして、大人が介入していかなければならない部分もあるようです。ただし、あとは子どもたち自身で

何をして遊ぶかを考え、実行に移していけば良いのではないかと、思います。

ですが、遊びとひとことで言っても、その中身が肝心です。何人かで公園に行って集まっても、それぞれが携帯ゲームを手にして対戦ゲームに集中しているだけ、というケースもありますから。もちろん、携帯ゲームや家庭用ゲームでの遊びを否定するつもりはありませんが、「こうしたゲームの場合、自分たちでルールを決め、それに従って自分たちの遊びを作り上げていく」というわけにはいきません。あくまでも他人が作ったものを、あらかじめ定まった手順に従って進めていくことになりません。だから、鬼ごっこなど、自分たちの力で遊びを作り上げていく場合なら育つであろう、創造力や自らの力で何かを成し遂げる力などは育ちにくいと言えます。

だからこそ、いろいろな遊びをしてほしいのです。高学年になると、習い事が増えてきて忙しくなることもあるでしょうから、せめて低学年の間は、バリエーションのある遊びを体験してほしいですね。

さて、遊びの話では他の子どもとの

関わりに関する話をとりあげましたが、一人遊びの機会があっても良いと思います。低学年の頃に、一人で集中して何かに取り組むのも大切なことです。一人で遊んでいても、何かうまくいかないことが出てくれば、そこで子どもは、考えて工夫をします。砂山にトンネルを作ろうとしてうまくいかなければ、水を使って固めてみるとか、そういう工夫ですね。問題解決のための試行錯誤、それを自分ができるということを経験の中で学んでいくのです。また、積み木やブロックで車を作ったり、折り紙をしたりするなど、自分で考えて何かを作る遊びでもいいですね。創造力や自らの力で何かを成し遂げる力を高めるのに良いと思います。

信頼と愛情で育まれる

コミュニケーションの力

話したり聞いたりする技術はどうやったらうまくなるのでしょうか。

話すにしてもきくにしても、それぞれを構成している要素があります。中高生以上になってくれば、その構成要素に関連した技能の育成が重視されてくるかもしれません。しかし、小学生

のうちは技能を育成するよりもむしろ、子どもが話している内容について親が質問するなど、会話の中身を広げ、深めることが大切でしょう。技能を意識するよりも、日常の会話を充実させることから始めてほしいと思います。

その際、親をはじめ、接する大人の立場で気をつけなくてはいけないことは、ていねいに話をきく、子どもの言うことに耳を傾けるということです。

例えば、子どもがケンカをして、相手が泣いてしまったとします。そしてそれがわかっただけで、多くの場合、親は子どもを叱りますよね。けれど、もしかしたら相手が叩いてきたから叩き返した、という事情があったかもしれません。それを十分きかずに、頭ごなしに叱るだけでは、子どもとしては不満や不信が募ります。親がきちんと理由をきいて、その上で叩くことはよくないことを伝えれば、子どもも納得できるでしょう。大人は、ややもすれば結果しか見ずに叱ってしまいがちですが、一歩立ち止まって考えてみることも必要です。「ひと呼吸置く」ということですね。それから「なぜケンカをしたのか」をたずねてみてください。

ここで大切なことは、理由を聞くつもりで、「どうしてケンカしたの!」と強い口調にならないことです。こうなると、子どもは、親の怒りのほうばかり気を取られてしまいます。そのせいで、本当のことが言えなくなったり、萎縮してしまったりする子もあろうかと思えます。だから、難しいですけれど、親のほうが一度、冷静になることをお勧めします。常に冷静に、というのは、実際には難しいかもしれませんが、すけれどね。時々でいいですので、そんな理由をきく機会を作ってあげてください。

要するに、見てくれている、考えてくれているということが伝わればいいのです。コミュニケーションの根底には、信頼がなくてはなりません。きちんと話を聞いていくことが、信頼を深めることとなります。技術的なことは、こうしたベースができて、年齢が上がってきてからでいいでしょう。

小学生のきく・話す活動とひと口に言っても、年齢によっても様子が異なります。

中学年から高学年になっていくと、成長の段階として、自分を表に出すこ



「書くための動機も 対話をした」と思い

文章を書くスキルについては、どうでしょうか。

文章を書くスキルを高める上では、字数制限を課すことがひとつの方法としてあります。これは大学生の例ですが、ただ漫然と書いているのと、400字や800字の中で、伝える情報を絞り、構成を考えるのでは、文章の練られ方が変わってきました。

また、学生の書いたものを添削していたところ、興味深い傾向が見えしました。それは、なかなか高得点が得られ

と自体に抵抗感が生じてきます。個人差があるので、いつころとはつきりとは言えませんが、授業中手を挙げる子どもが少なくなる、という現象も、その一例と言えるでしょう。しかし、この傾向についても、すべての学校やクラスで共通と、いうわけではないのも事実です。現に、高学年でも活発に意見交換がされているクラスが存在します。それは結局、そのクラスの中で、お互いのことを受け入れる関係が確立されているということだと思います。

ない学生ほど、句読点を打つことや一文の長さを短くすることなどに非常に注意を向ける傾向が見られたことです。技能的なことばかりを気にするあまり、伝えたいことが伝わりづらくなってしまっていたのかもかもしれません。あくまでもひとつのケースです。

ただ、小学生の場合は事情が少し異なります。スキルを高めることは大切ですが、むしろ、「書きたい」という気持ちが高まることのほうが大切なのではないかと。日記などを書き続けていると、次第に書けるようになるという傾向がありますが、それは、書き慣れ以上に、「先生に話したい、伝えたい」という動機が高まるからだと思います。先生が読んでくれて、きちんとリアクションがあるからこそ、書きたい、という気持ちが高まるのではないのでしょうか。

やはり、書くという点において、コミュニケーションは双方向なのです。伝えたいことができてくれば、伝える内容などをいろいろ考えますからね。あるのは、人と人との対話です。手段が変わったとしても、それは何も変わらないと思います。



昨年に行われた小中高校生が科学のおもしろさを直に見て・聞き・ふれることのできるプログラム「ひらめき ときめきサイエンス」

コミュニケーションの達人になろう 講座では、中高生を対象にいろいろなゲームを通して、よりよく相手に「話す」、相手のことを「きく」ためには何が大切であるかを考えました。



定学学式

・自分の話し方・聞き方の特徴
・体験が中心の授業形式
・自分が伝えたいことを正確に伝えるための練習
・自分の伝えたいことを正確に伝えるための練習

定学学式

・自分の話し方・聞き方の特徴
・体験が中心の授業形式
・自分が伝えたいことを正確に伝えるための練習
・自分の伝えたいことを正確に伝えるための練習

定学学式

・自分の話し方・聞き方の特徴
・体験が中心の授業形式
・自分が伝えたいことを正確に伝えるための練習
・自分の伝えたいことを正確に伝えるための練習

定学学式

・自分の話し方・聞き方の特徴
・体験が中心の授業形式
・自分が伝えたいことを正確に伝えるための練習
・自分の伝えたいことを正確に伝えるための練習